

I S インフィニット・ストラトス 武器を憎む琥珀の少年

八神刹那

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

傭兵として戦いながらも武器を憎む少年、ソラン・S・ストラデイスはとある戦いの果てに死んだはずだが、平衡世界に飛ばされてしまう。そこはISと呼ばれる最強の兵器が世界の軍事パワーバランスを保っている危うい世界であった。その世界で少年は宿命の敵、敵の敵と再会する！ 少年は過去の因縁と決着をつけるためにIS、トワイライトを駆る。

「ソラン・S・ストラデイス。トワイライト！ 出撃する！」

目次

prologue	1
episode 1	3
知らない世界と変わらない世界	
戦う理由	8

prologue

「ハハッ……結局はこうなるのか」

砂漠のとある廃墟で少年は自嘲気味に笑いながら煙草をくわえていた。毛先だけを赤く染めた茶髪に優しい琥珀の瞳。まだ、20にもならない若い少年だ。

師匠譲りの二丁のガンブレイドが目の前に転がっている。銃弾はもうなく、ただの近接用の武器と化している。だが、少年にはそれとはもう叶わない。

もうどれだけ走ったのか、どれだけ撃ったのか、どれだけ身体が傷ついているのかわからない。

「フー。因果応報っていうのはこのことを指しているのか」

唯一使える右手で最後の煙草を消す。彼の左手は数分前に消し飛ばされた。

空からハインドが何機も飛んでいる。おそらく少年のことはすでに捉えられているのだろう。パイロットがその気になれば少年をハチの巣にすることなど造作もない。

「打つ手なしか」

少年がしようがないと空を見上げる。空は赤く、朝焼けか夕焼けなのかわからない。それでも暗がりの空に光る星々を綺麗だ。

「いたぞー！」

「囲めー！」

少年を追っているHTC社の傭兵部隊が周囲を取り囲んだ。

「われらの仲間の敵。撃たせてもらうぞ。ソラン・S・ストラディス！」

傭兵たちが少年に銃口を向ける。避ける体力はどうに使い果たしている。それにもう抵抗する気はない。十分、戦った。

「最後に何か言いの残すことはあるか？」

隊長らしき人物が問う。少年はそうだなと言って

「お前たちはこんな世界で満足か？　こんな表裏はつきりした世界で、血で血を洗う世界で？　俺は……」

コートの中身を見せた。傭兵たちがぎよつとする。コートの中身は無数の爆弾。それもここ周辺を軽く吹き飛ばす超高性能の代物だ。

隊長が退避を命じる。

「もう遅い。この世界はどこまで落ちるのか。はたまた、尾を噛む蛇となるのか。あの世で見えていてやるよ」

それでも少しだけ後悔している。家族のこと。仲間のこと。そして、恋のこと。

(.....ちゃんと言つとけばよかったな)

脳裏をよぎったのは自分に戦いのことを教えてくれた隻眼の女性。あの人美しい人いないだろう。

だから少しばかりためらったが、彼女はもういない。

「俺ってやつぱバカだよな」

笑みを浮かべながらスイツチを押しした。光が輝き、爆発。きのこ雲を作り出し、その砂漠一帯を消し去った。

少年の名はソラン・S・ストラデイス。SSSと呼ばれた凄腕の傭兵であった。

だが、少年は知らない。爆発の直前、彼の周りだけが怪しく光、彼だけがどこか別の場所に飛ばされたことを。

そして、それが彼の新たな戦いの始まりだということ.....。

episode 1 知らない世界と変わらない世界

地図に載っていないとある島。美涼・アラニーヤの朝は島の海岸を散歩することから始める。

「うん。今日もいい天気」

鮮やかな薄い金髪をなびかせながら大きく伸びをする。

「やっぱ、抜けてよかった」

彼女の今の肩書は世界最強の兵器ISを開発するための技術者。元は欧州やアジアのどこかの国でISの操縦者をやっていたのだが、逃げると言う置手紙だけを残して逃亡した問題児であった。

「自由って最高」

そんなことを呟きながら歩いていると、

「あれは……」

視線の先、浜辺に倒れているモノ、いや、人が見える。

「人？」

美涼が近づくと、まだ二十歳にもならない少年が倒れている。

「ちよつとー！ 大丈夫!!」

声をかけるが少年は眠っている。そんなことよりも

「これって……」

美涼の目に留まったのは少年が首に下げているアクセサリー。まるで天使の羽をモチーフにしたような奇妙な形だ。

「まさか」

脳裏に先日起きたとある出来事が過ぎる。

「とりあえず、運ばないとー」

朝早くからとんだものを拾ったと思いながら、美涼は少年を自分の研究所まで運び始めた。

真つ暗な暗闇のなかソランの前には2人の男が立っている。男たちは不気味な笑みを見せながら

『君はただの道具だ。それも君の憎い武器を使うための』

『僕は悪くない。だって僕のしたいことは全部、正しくなるんだから』
何を言っているんだお前は……！！ お前たちみたい人間がいるから世界は！ この世界は！

こんなにもどうしようもないんじゃないか！

「ふざけるなあー！」

その言葉を発し、ソランは目を覚ました。目を開け、汗でぬれた体をゆっくりと起こし、辺りを確認する。どうやらどこかの部屋のベッドの上らしい。

「確か、俺は……」

記憶を辿ろうとするが、あの悪夢が、呼び起こされる。最凶最悪の敵、仇。いや、そんな言葉では生温い。どんな言葉を使っても表現できない敵。

「なんでだよ……」

嫌な起き方をした。自分が生きていることよりも悪夢の方がソランにとっては嫌なことのようにだ。

「どうしたの？ 叫び声が聞こえたけど」

開けっ放しのドアから1人の女性が入ってくる。薄い金髪が特徴の東洋人のようだ。

「いやな夢でも見た？ とりあえず、水飲みな。それからわたし特製のコーヒーをどうぞ」

女性はベッドの近くの椅子にやんわりと腰をかけ、テーブルに2人分のマグカップを置く。

「……」

ソランは警戒しながらも女性の言うとおりにペットボトルのミネラルウォーターを飲み、女性が淹れたコーヒーの入ったマグカップに手をかける。

「さて、わたしは美涼・アラニーヤ。この島でISの研究をしているモノだよ。君は？」

女性、美涼の問いかけにソランはコーヒーを一口飲んでから

「俺はソラン・S・ストラデイス。ただの……」

「少年兵だったけど、今は傭兵？」

言葉を遮った美涼を睨む。すると、彼女は

「悪いと思っただけけど、君のISを調べさせてもらったんだ。びつくりしたよ。男でISを動かせる2人目の人物がいるなんて。それよりも、ソランくん。聞き慣れない言葉があるって顔してるけど、質問はあるかな？」

「……」

ソランは美涼を見ながらさらにコーヒーをすすする。不思議な空気を纏った女性だ。飄々としているというより、自然体のまま人を話にのめり込ませる。

「IS。あなたがさっきから言っているISとはいったいなんだ」

ソランが思っていたことを言うと言おうと美涼は得意げに、それもそら来たという表情を見せた。

「やっぱり、訊くと思っただけだよ。君のことを少々調べさせてもらうおうと思っただけ。ISからは拒否反応。だから世界中のPCハッキングして君のことを調べてみようとしてもまったく引つかからない。そこで私は1つの可能性を考えた。そして、さっきの君の言葉がそれを肯定した」

彼女が何を言っているのか意味が分からない。経過しながら美涼を見ていると

「君の存在を言ってしまうと君は、異世界から来た人間ということになっちゃってしまうんだ」

「は？ どういう意味だよ」

「君がさっき私に訊いた質問。ISとはいったいなんだ？ これはこの世界の住人ならまず聞かない質問。答えはあとで教えるよ。それなのに君は疑うことなくこの質問をした。つまり、そこから導出せるのは君がこの世界の住人ではなく、別の世界から来た人間という推察が正しいということを証明している」

不思議な空気をまとった女性だと思っていたが、彼女の言っている

ことにはまるで信憑性を持ってない。だが、不思議と彼女のいていることが嘘のようには思えない。

「……………あなたの推測があつているとして、俺が異世界の人間なら、俺にこの世界のことを教えてくれないか？」

「良いだろう。まず、君はこの世界の兵器がどこまで発展していると思う？」

「兵器……………。まだ、無人機が軍事的に利用されて間もないころだと思うが」

そらんが適当に答えると、美涼は

「残念。そんな時代はかなり前だ。といつても兵器なんてたった1、2人の天才がとんでもないものを作つてしまえば風潮とかはガラリと変わつてしまう」

笑いながら答える。本当につかみどころのない女性だと思ひながら、ソランは質問を続ける。

「その言い方だと、天才がとんでもない兵器を作つたといつていうのだが」

「正解。作つたんだよ。とんでもない天才がとんでもない兵器を。それも世界の情勢をガラリと変えるようなね。それが————インフィニット・ストラトス。通称ISなんて呼ばれる平気だ」

それからソランは美涼からISのことを聞いた。篠ノ之 束という科学者が作つたこと。白騎士事件のこと。コアのこと。そして、女性にしか使えず、世界が女尊男卑の風潮になつてしまったこと。できる限りの情報を取り込んだ。

「それがこの世界のことだよ。どう？ 感想は？」

「異世界つて言つていたから少しは変わるのか思つていたが何も変わらないのか。世界はどうしようもなく歪んでいる。それよりもあなたの言い方だと俺がISを持つているようなことを言つていたが」

「そうだよ。君はなぜか知らないけど。ISを持つていた。それも絶対数467機とは違うコア。だから、調べさせてほしい」

美涼は1人の研究者として機体を調べたいと思つていようだが、ソランは

「断る」

とはつきりといった。

「なせ？ 君がこの世界にいることを知るチャンスかもしれないのに」

「勝手な理由かもしれないが俺は兵器が嫌いだ。それも話を聞く限りだ。この世界は生物として種を絶滅させる一歩前の段階に近い。そんな兵器を俺は……」

「憎んでいる？」

「ああ。俺は傭兵だが、兵器が嫌いだった」

「うーん。なんで聞きたいけど。聞かないでおくよ。地雷を踏みくないからね」

「……」

ソランは黙ってしまう。この美涼という女性はその研究者ではないというのは傭兵時代の感から察することができるがそれ以上に危険な何かをにじませている。

「まあ君が拒否するならいいとして、これは返しておくよ。一応君のものだからね」

美涼はポケットから取り出した天使の羽のようなアクセサリをソランに渡す。その時だった。

「何かくる……」

「え？」

「伏せろー！」

何か危険を感じたソランは美涼を押し倒す形で床に伏せた。同時にとてつもない衝撃が走り、警報が鳴り響く。

「RPG？ いや……！！ ロケット？」

「ソランが警戒しながら窓の外から空を見ると人型の何かがある機、飛んでいる。」

「あれは……」

「IS。さっき話した。この世界最強の機動兵器よ」

空から見下ろす起動兵器。ソランはただそれを見上げているしかなかった。

episode 2 戦う理由

窓から見える空には3機のIS。それを見た美涼は

「ラファール・リヴァイヴ。それも特殊部隊使用が3機。かなりやばいかも」

少しだけ顔を青ざめていた。

「確か、ISを軍事的に利用することは禁止されているはずだろ。なんでこんなところに!?!」

「それはやつこさんに聞かないとわからないわ。それよりもついてきて」

美涼はそう言って足早に部屋から出ていく。階段を降り、地下へ向かう。ロックされた扉を開け、中に入ると、そこは

「博士。敵です」

「わかってるわ。どこの国?」

「そこまでは……」

「リヴァイヴだから欧州のどっかだろうけど、いきなり撃ってくるなんてね」

「どうします?」

「うーん」

多種多様な機器。どうやらISを研究するための施設らしい。しかも

「おねえちやーん!」

「こわいよー!」

子供までいる。それを見たソランは

「子供を利用していいのか?」

美涼をにらんだ。

「まさか、この子たちはただの孤児よ。それも戦災孤児。離党するなんて人聞きの悪い」

彼女の目を見る限り、嘘ではないようだ。

「しょうがないわね。ウイングは?」

「まだ無理です。最終チェックすらしてないんですよ。それに武装

だって」

「良いわよ。サーベル一振りあればいけないことはないわ」

話を聞いている限り、彼女が一人であるの三機と戦うらしい。

「ソラン君。元傭兵でしょ？　うちの職員を退避させて」

「……………あなたはどうする？」

「私しか戦える人がいないでしょ。時間稼ぎぐらいできるわよ。ほらさっさとデータをまとめて」

そういうと彼女は装甲が置かれたISの前に立つ。

「ねえちゃんいつちやうの？」

「帰ってくる？」

「うん？　心配しないの。私は大丈夫だから。それにほら男なら泣かない！」

その美涼の周りの子供たちが囲む。その光景は

『マルー！　ダイナ！』

『お兄ちゃん！　いやだよ！』

『ソラン兄ちゃん！』

あの事件と似ていた。ソランはゆっくりと美涼の前に立ち、

「俺のIS。動かせるのか？」

と言った。

「あなたがデータを解析してくれるならね。なに？　あんたが戦うの？」

「ああ」

「さつきは兵器が嫌いとか言ってたのに？」

「確かに俺は兵器が嫌いだ。だが、目の前で人が死ぬのはもつと嫌いだ。だから、戦う」

「……………また戦うだけの日々になるかもよ？」

「それが俺の道なら歩くだけだ」

ソランの決意に美涼は

「オーケー！　気に入ったわ。そうになったら。総員ただちに船に乗って退避！　とんずらするわ！」

意気揚々と指示を出した。

「ソラン君はこっちに来て。それとあのアクセサリを」

美涼はそういうと天井に穴の開いた一角にISを展開させる。黒と赤を基調にしたオーソドックスなIS。

「パスワードは？」

それを聞いたら思い当たる単語は一つしかない。

「ヨルムンガンド」

それを聞いた美涼が素早くパスワードをj入力すると

「よし！ ロック解除！ つて！ なにこの機体！」

データを見た美涼が驚きの声を上げる。

「はあ!? なにこの拡張領域!? おまけに瞬時換装システム!? どうなってんのこれ!?!」

接続した機体のデータを見ただけで美涼は悲鳴を上げる。画面に映し出されたのは現存する度のISをもう上回るほどのスペック。

「機体名トワイライト。どうなってんのよ……」

色々な考えが脳裏をよぎるが今はそれどころではない。

「行けるのか？」

ソランの声で美涼が現実世界に引き戻される。

「当然。機体に手を触れてみて」

美涼の言葉にソランは躊躇することなく、目の前のIS、トワイライトに触れる。

「これはっ!?!」

手を触れた途端、金属同士が擦れ合う音とともに頭の中に情報が流れ込んでくる。

ハイパーセンサー最適化完了。装甲展開完了。

システムオールグリーン

トワイライト 機動

同時にソランの体にISが纏っていく。体がふわりと浮かぶ。

体を確認する。纏ったのは黒を基調にし、赤いラインが入ったシンブルな機体。てっきり全身装甲かと思っていたがそうではなく、顔や体の一部分だけは露出している。

初めて使う兵器だが、不思議と負ける感覚はなかった。

「いける？」

「ああ」

「よし。戦い方はあんたに任せる。だが、その機体はまだ一次移行してないから気を付けて！」

「了解。ソラン・ストラデイス。トワイライト！ 出撃する！」

ソランはスラスターを吹かせ、空へと飛んだ。

視界に移ったのは青空。機体は自分が念じた動きそのまま動く。

「すごいな」

素直に驚くと、モニターが敵を映し出した。3機。ラファール・リヴァイヴという機体らしい。

「今の武装は……」

指定されたのは両腰に装備された刃の付いた銃。ガンブレイド。それを握ったソランはうつすらと笑った。

「なるほど。おあつらえな武器だ」

握った得物はあの世界と同じ感覚。神が本当にいるなら粹なことをしてくれたものだ。

ソランは敵機をとらえ、傭兵の顔つきになる。

「状況開始……」

黒い機体トワイライトはスラスター吹かせ、3機の敵へ駆けて行った。